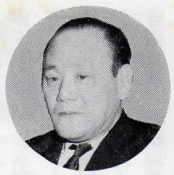
MIYABI　No.1

■昭和49年3月31日
■発　行／徳島県邦楽協会
（徳島市かちどき橋1・県教育委員会社会教育課内）
■発行人／春　名　完　二
■印　刷／株式会社　出　版（徳島・幸町1）

会報「みやび」の発刊を祝う

〝芸どころ〟を継承

森田　茂



協会が発足して六年。この間、県芸術祭の開催にあたって毎年、邦楽大会を主催し、四十七年度には、その開幕式典を飾られました。また、加盟八部門のみなさん方は、日ごろから盛大に研鑽の成果を発表するなど、県邦楽界の振興に寄与されてこられました。

邦楽は日本の伝統芸術ですが、若い継承者が少なく、すたれゆく傾向にあります。こうしたなかで、本県が他府県にまして隆盛をきわめ、若い人たちにも受け継がれていることは、ひとえに協会関係者のご努力のたまものと存じます。

心の豊かさが求められている今日私ども日本人の心のなかに培われてきた邦楽を、より多くの人々に理解してもらい、大衆のものとして広めてゆくことは、単に邦楽の発展にとどまらない、重要な意味を持つとも考えています。阿波は芸どころ―会報の発刊をお祝い申し上げるとともに、いつまでも〝芸どころ〟であってほしいと願ってやみません。

（徳島新聞社社長）

めざましい活動

名賀石　操

徳島県邦楽協会が結成され、本県における伝統芸術の振興と普及に力をつくされてこられたことは、記憶に新しい快挙でありましたが、はやくも六年を経過しその間、着実に発展の一途をたどられておりますことは敬服にたえません。県芸術祭の中心行事としての邦楽大会、わが国最高水準の方を招いての創作邦楽演奏会等、その活動はめざましいものがありますが、それにもまして、会員ご一同の強いまとまりは、うらやましいほどであります。

このたび、会報を創刊されるはこびとなりましたが、会員相互の理解と連帯をさらに深め、本協会の活動を広く周知される上で、極めて有意義なことであります。

時代の要請として、心の豊かさ、

改めて敬意を

松村益二

しろうとのわたしには、こまかいことのわかろう道理はありませんが、邦楽が大きく新しく飛躍する時代がきた、そんな感じを強くうけます。

協会が生まれて、はや五年経ちました。

邦楽のあらゆるジャンル、あらゆるグループが、いっしょになって、個々のエゴや利害得失を越えて、邦楽の新世紀を拓くということは、理屈では理解できても、さて実際に当たってみると、大へんな仕事だろうと思います。

おたがいが、おたがいのジャンルを理解するには、しんぼう、がまんがなくては、成り立つ道理がありません。

協会はその仕事を、六年間よく努めてきたと思います。

何のお手伝いもできませんでしたわたくしは、内心恥ずかしい思いでいっぱいです。しかし心から会の発展を祈っているひとりだと、はっきり公言できます。

幹部の方々や会員の皆さまに、改めて敬意を表する次第です。

（四国放送社長）

一段と飛躍を

向島安市

徳島県邦楽協会が結成六周年に当たり、これを機に会報を創刊するとのことであります徳島県芸術祭発足の中で、協会の結成を勧奨し、その成果に期待を寄せうるおいが強く求められる中で、本協会の果たす役割りはますます大きなものになるでありましょう。

本協会のご発展を心からお祈りいたします。

（県教育長）

徳島県邦楽協会が発足した私どもとしては、眼前に協会の隆盛を見るにつけ、感慨深いものを覚えるのであります。

経済偏重の赴くところ自然の崩壊社会の荒廃を招くに至った今日、国

民挙げて、その救済と復興に力を尽くさなければ悔いを後世に残すことになります。この際、日本の伝統芸術の振興こそ急務といわなければなりません。

本県邦楽の興隆に確たる業績を積み上げつつある本協会の使命は、いよいよ重要性を増して参りました。本会報発刊は、この使命達成に一大前進を約束するものでありまして、衷心祝福いたす次第であります。

（県郷土文化会館館長）

心と技の向上に

藤村一夫

このたび、徳島県邦楽協会で会報を出されるというお話しを伺い、心からのお慶びを申しあげます。

毎年秋に開催の邦楽大会には、いつもご招待をうけ、大変ありがたく思っております。欠かさずとはいかず、残念がることも多いのですが、立派なプログラムのなかに若きころ放送を通じてお世話になった方々のお名前を見い出すにつけ、なつかしく、うれしく思いますとともに、ひと昔、二昔、長い間のご精進とご熱意に敬服いたしております。

四季の移り変わり、眉山を眺めて育った県民のひとりです。絶やすことなく、いつまでも受け継がれてゆく邦楽の心と技術。会の運営に当たられる関係者みなさんのご努力にも感謝いたします。

会報は諸団体、会流派の連携をいっそう密にされることでしょう。会報は邦楽愛好家の親睦をより深くされることでしょう。県下邦楽界のますますのご発展を祈願いたします。

（NHK徳島放送局長）

邦楽協会役員

◇顧問＝志摩誠一、名賀石操、藤村一夫、松村益二、森田茂、向島安市。

◇会長＝春名完二

◇副会長＝田辺倫憲、西岡黎山、村上宗雄。

◇常任理事＝常磐津勘文字吉、天野義雄、寺内久視子、後藤鹿三、稀音家四郎辰、松永和四末、松永和三寿、望月太三江、大櫛亜童、桝本眉風、沢田青葉、原田恵津子、田村梅扇、堀小勇喜、堀小勇勝、内田欽水吉田景昶、野崎瑞鳳、吉田鶯風、吉崎宏泉、尾田旭鳴、折目忠治、武田重文。

◇会計理事＝佐藤勝山。

◇監事＝秋野鳴山。

ご招待席

色彩感覚と邦楽

佐野まもる

日本の花は、どれにも共通した控え目な色を持っているようである。ひと口に優しいといわれるのは、その故であろう。春から夏にかけて咲くものは、日本の花といえども派手であるが、それを西洋の花に比べると、これは遙かに地味である。色が静浄であるために、その感じがずっと落ちついている。それが秋や冬に咲くものとなると、ぐっとわが国の花らしい色彩を持ってくる。木槿・鳳仙花・女郎花・藤袴・ききょう・萩・りんどう・山茶花・茶の花などどれを取っても全く純情で清澄で、そして素朴である。私は俳句作家であるから常に花の観察を怠らないがこうした秋から冬に咲く日本の花ほど、深い味をもつ洗錬された色合いのよろしさは、とても西洋のものとは比較にならない。

日本という国、花の色彩から考えただけでも、全く西洋と異なった特色があってありがたいと思う。その土地が寒帯から熱帯にひろがって、大洋の中に浮いていることが既に特異だが、その上に、四季折々の気候の変化が画然として、それがほとんど三ヵ月に平均した長さで続くというすばらしい国である。こうした影響を受けて、花々の自然の色彩に深い陰翳が投じられ、洗錬された美しさが生まれてくる。それを私は不思議な天然の叡智がさせる、見事なる調節と信じている。

日本の花が清純な深い味を保つことは、日本の各種の色彩に影響してやがて日本の色という高雅なものを造り出した。天平、平安の古くから江戸末期にいたるまで、日本で発展した色彩の趣味は自然な人間心理の発露として、原色的な綺麗を廃除し灰色を十分に加味した複雑な中間色をよしとした。高尚な好みと、渋い好みと、それに意気な好みがそこに存在した。

春　故・石川真五郎画伯（一水会）

高尚な部類の代表的なものは紫である。紫は西洋では到底通じない日本独特の哀調だ。渋い好みの代表は茶系統であろう。ことに新鮮な秋の魅力だが、この脱俗的な趣きはどうも西洋には受け入れられもい。その次は意気好みという厄介な色だが、これは納戸系統にとどめをさすだろう。

明治、大正、昭和と外国のカラーに混乱させられて、次第に日本の特色ある色彩が忘却の彼方へ押しやられてゆくのは私にはとても悲しい。つい先日、徳島のある田舎で高級住宅らしい構えを見た。応接室らしい西洋建てを母屋にひっつけているのはいいとして、その屋根が真赤の瓦で葺いていて、母屋の黒い古来の瓦と全く調和が取れていないのに驚いた。日本人の色感は、いまこんな風に失われているのである。

さて、私は音楽には門外漢であるしかし西洋音楽と邦楽の間にも、西洋と日本との色彩感覚ほどの差は相当あるだろうと思う。その証拠には一般的に外人の多くは日本音楽を面白がらないようだ。ちょうど、日本の花の色彩が外人にはさびし過ぎて受けないのに等しい。しかし私は、邦楽が日本の伝統的な色彩の趣味を踏襲する精神とともに、邦楽にも洋風の色彩を添加する方法によって新しい発展を期してもらいたいと念願しているが、無理な話だろうか。

（徳島ペンクラブ会員・俳句作家）

行事メモ

昭和48年4月～昭和49年11月予定

催しの名称	団体	期日	会場
〔48年〕新年唄い初め	小唄田村白扇会	1月	料亭今年竹
新春定期演奏会	上田流尺八道竹龍会	1月7日	京都市
春季定期演奏会	〃	3月18日	大阪市
昭和48年度春期昇段審査びに練成会	関西吟詩文化協会景昶会	4月1日	小松島中央公民館
県支部連合会春季大会	哲泉流日本吟詩学会脇町支部	4月15日	牟岐小学校
お琴の会	日本当道音楽会	4月22日	徳島市文化センター
献奏（伏見稲荷大社）	上田流尺八道竹龍会	4月25日	京都市
故初代八木瑞堂追悼1周年全国名流吟詠剣詩舞大会	揚心流日本朗詠会	7月8日	県郷土文化会館
尺八本曲大会	上田流尺八道竹龍会	7月15日	高松市
夏季練成会	尺八琴古流美風会	8月19日～20日	鶴林寺
ゆかた会	小唄田村白扇会	9月	料亭青柳
吟詠鶯風流徳島県大会	吟詠鶯風流	10月7日	眉山簡易保険保養センター
宗家講習会	哲泉流日本吟詩学会脇町支部	10月27日	脇町公民館
県支部連合会秋季大会	〃	10月28日	脇町体育館
徳島銀明会三曲演奏会	徳島銀明会	10月28日	県郷土文化会館
哲泉流日本吟詩学会徳島支部結成10周年記念大会	哲泉流日本吟詩学会徳島支部	11月3日	〃
予科練戦没慰霊献奏	上田流尺八道竹龍会	11月3日	和歌山市
脇町文化祭協賛詩吟剣詩舞大会	哲泉流日本吟詩学会脇町支部	11月4日	脇町体育館
遷宮祭典献奏	上田流尺八道竹龍会	11月10日	伊勢神宮（内宮）
第2回八綾会箏曲演奏会	三曲八綾会	11月18日	昭和会館
葉風会箏曲演奏会	葉風会	11月18日	県郷土文化会館
昭和48年度秋期昇段審査並びに練成会	関西吟詩文化協会景昶会	11月25日	同対センター
〔49年〕脇町八幡神社新年奉納吟詠会	哲泉流日本吟詩学会脇町支部	1月1日	脇町八幡神社境内
新春初吟会	〃	1月2日	脇町教室（支部長宅）
新春定期演奏会	上田流尺八道竹龍会	1月13日	京都市
吟詠鶯風流第25回大会	吟詠鶯風流	1月13日	同対センター
新年唄い初め	小唄田村白扇会	1月	料亭今年竹
第2回詩吟剣詩舞道大会	中四国剣詩舞道総連盟徳島県本部	3月10日	県郷土文化会館
徳島県詩吟剣詩舞道連盟春季大会	哲泉流日本吟詩学会脇町支部	3月10日	〃
春季定期演奏会	上田流尺八道竹龍会	3月17日	大阪市
昭和49年度春季昇段審査ならびに練成会	関西吟詩文化協会景昶会	3月24日	同対センター
哲泉流日本吟詩学会全国大会出場者徳島県予選大会	哲泉流日本吟詩学会徳島支部	4月28日	新町小学校体育館予定
県支部連合会春季大会（兼コンクール）	哲泉流日本吟詩学会脇町支部	4月28日	未定（徳島市内）
宗家講習会	〃	4月29日	脇町公民館
尺八演奏会	尺八琴古流美風会	5月5日	県郷土文化会館
お琴の会	日本当道音楽会	5月12日	徳島市文化センター
ゆかた会	小唄田村白扇会	8月	料亭青柳
芸術祭参加秋季詩吟剣舞大会	揚心流日本朗詠会	9月22日	県郷土文化会館
献奏	上田流尺八道竹龍会	9月23日	伊勢神宮（内宮）
徳島佐苗会第1回長唄演奏会	徳島佐苗会	9月29日	県郷土文化会館
第3回八綾会箏曲演奏会	三曲八綾会	9月末か10月初	〃
秋季演奏会	上田流尺八道竹龍会	10月6日	高松市
吟詠鶯風流秋季大会	吟詠鶯風流	10月上旬	県郷土文化会館
県支部連合会秋季大会	哲泉流日本吟詩学会脇町支部	10月20日	会場未定（阿南市内）
第13回脇町文化祭，協賛詩吟剣詩舞大会	〃	11月3日	脇町体育館
第1回徳島県青少年詩吟剣詩舞大会	〃	11月初旬	青少年センター予定
芸術祭参加第1回青少年詩吟剣舞大会	中四国剣詩舞道総連盟徳島県本部	11月10日	青少年センター
哲泉流日本吟詩学会徳島県連合会練成大会	哲泉流日本吟詩学会徳島支部	11月中旬	阿南市
箏曲演奏会	葉風会	11月17日	県郷土文化会館
献奏（伏見稲荷大社）	上田流尺八道竹龍会	11月23日	京都市
昭和49年度秋季昇段審査ならびに練成会	関西吟詩文化協会景昶会	11月25日	同対センター

＝会長あいさつ＝

精心をこそ

春名完二

「みやび」が発刊されますにあたり、協会設立当時のことを思い起こし、よくここまでこぎつけることができたと安堵めいた感とともに、感慨無量なるものがあります。当時の県教育長向島安市氏、社会教育課の山本恒夫氏の大変なご援助があり、昭和四十八年十二月、県下邦楽八部門が一致団結し、大きく第一歩を踏み出して以来六年の歳月が流れました。そして、その間は決して安易に成長して来たわけではなく、それぞれにいろいろの場所で壁にぶちあたり、批判もうけながら、それぞれの事態を各会員が立派に乗り切り、しかもそれらをそしゃくし血とし肉としてきたことは、より高い感覚と人格の持ち主の集まりだからこそ、ここまで成長して来たものと信じます。

過去を振り返りその結果から推して、協会のあり方なり存在価値を考えてみるとき、まず内面的には、邦楽と一口にいっても八部門ありますが、その各部門が育って来た歴史的生い立ちは同一なわけではなく、それぞれ育った時代も全く異なっており、また環境も異なっています。したがってそれぞれの習慣もおのずからちがっているわけですが、協会ができてからお互いに知らなかった面を理解し合うように努力してきたことが、相互間の親睦にも結びつき、これが進歩の大きい原動力になっていることは事実でありましょう。

一方、外面的社会性からみた場合まだ満足する点にまでいっていないたしかに邦楽は普偏性がないと従来から指摘されていますが、これも所詮人間の中に育ったものですから、全くわからない代物ではないと信じますが、そこらあたりに何か将来の指針となるようなものがあるのではないでしょうか。

文化は時代を象徴するといわれますが、現在のような物質文明の発達は、得てして文化はその影に潜みがちなものです。現在とくにわが国においては、その感が強いようです。だからこそ物質優先とか経済優先とかいわれて、醜い争いが絶えないわけですが、この時こそ文化の意味の重大さをひしひしと感じさせられるのです。その一端を担っている邦楽は、現在のような荒漠たる人々の心に、温かさと豊かさを送り込む大切な役割を演じなければなりません。一定の厳しい規律の中にも、お互いに譲り合い、尊重し合う精神がさらに美しさを増し光を放す結果になるのでしょう。

この点は他の文芸、絵画等には見られぬことですが、邦楽の社会におけるこの精神は、人間社会にも一脈相通じるものがあるといえるでしょう。いわば邦楽での集団性は、鑑賞する側をも含めて、一つの縮図といっても過言ではないでしょう。この不顕性な邦楽の精神は、ひいてはまだ人々に理解されていない社会福祉の精神に結びつき、そこに進んで理解せねばならない、いわば顕性にするという社会的価値が生じてくるのでしょう。このような観点からすると邦楽の将来に対する課題は、その辺になければならないということが理解できます。

この機にあたり協会の会報「みやび」が発刊されるわけですが、その名称は実に当を得た名であり、また協会の将来に対する指針の重大さからして、その足跡を著るすのに充分な名称であります。堂々と前進する邦楽協会の足跡を刻みながら、共に歩む「みやび」の今後の発展を心から希う次第です。

（協会会長）

協会六年の歩み

間もなく午前十時、郷土文化会館大ホールの八つの楽屋は、続々とつめかける出演者でたちまちあふれる「おめでとうございます」「お世話になります」「ご苦労さんです」と様々なあいさつがとび交う。第七回県芸術祭邦楽大会の開幕前の緊張と期待の交錯するひとときである。

出演団体二十八、二百八十七人、七時間をこす大発表会がかくて本年も盛大に開催された。いうまでもなく協会加盟の邦楽八部門は、それぞれに異った伝統、芸術的主張をもつものであるが、それらを超越して邦楽の発展のために、これほど一体となって活発に活動している例は他県にはあまり多くない。

この六年間、順調に発展したと一口に表現される邦楽協会も、実は一歩一歩が新しい経験であり、会員の努力の跡でもあった。昭和四十二年初めて県芸術祭が開催されるに及んで、県邦楽界でもこれを大いに歓迎し、従来、個々に活躍してきた邦楽各分野の団体が大同団結し、本県邦楽界発展のために一大飛躍を遂げたいとの目的から、漸次話し合いを進め、遂に同年十二月十七日、偕楽園に四十三会派五十八人の代表が集って徳島県邦楽協会を結成し、春名完二氏を会長に選んだ。翌年の第一回邦楽大会は二日間にわたり実に四百二十四人が出演して門出を飾った。第二回以降は毎年十月中旬の日曜日を邦楽大会と定め、多彩で、けんらんたる舞台は年々好評を博し多大の成果を着実におさめつつある。

この間、四十四年と四十六年の二回、現在、日本の最高水準をゆく演奏家を招き、邦楽芸術の粋を鑑賞する機会として創作邦楽演奏会徳島公演を成功させた。また、地方の文化の振興をはかる目的で開かれた四国地区文化振興会議には、高知、松山徳島会場にそれぞれ代表をおくり、音楽の振興方策を論ずる中で邦楽の立場について充分主張をした。特筆すべきは、四十七年度県芸術祭開幕式典の記念公演を当協会が受持ったことで、代表百十人によるけんらんたる舞台は、芸どころとくしまの面目躍如たるものがあった。昭和四十八年九月、徳島県文化協会の結成にあたっては、その準備発起組織の一つとなり、徳島の芸術文化界にゆるぎなき地位を占めてきた。

当協会の役割は、ますます大きなものになるだろう。

（邦楽協会事務局）

編集後記

▼発刊に当たって顧問の方々からお祝辞をいただき創刊号の紙面を飾ることができました。紙上を借りて厚くお礼を申し上げます。

▼三・四面に会員名鑑を掲載いたしました。ご協力を感謝します。

▼機を見て随時発刊していくつもりです。本紙に対するご意見ご希望がありましたら事務局までお申しつけ下さい。

▼編集の指導は徳島新聞社文化部長井村幸男氏にお願いしました。また㈱出版の四宮定明氏にも大変お世話になりました。お二人にも心からお礼を申し上げます。（事務局）

＝題字は後藤泰秀氏＝